

江戸時代中、後期の住まいについての研究 — 家相の文献を通して — (第八報)

東京家政学院大学 村田あが

目的 昨年度の本研究第7報に続き、江戸時代中、後期の家相の文献を通して、当時の人々の住まいに対する考え方を探る。今回の報告では、家相文献の著者像に焦点をあて、「家相考鑑」という作業が実際にどのように行われているのかを明らかにする。

方法 東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の家相文献のうち、寛政10年(1798)刊行の『家相図解』、享和元年(1801)に序文が書かれ、同2年刊行の『相宅小鑑』、文化元年(1804)刊行の『家相図説大全』、文化元年(1804)に序文が書かれた『家相図解全書』天保11年(1840)刊行の『家相秘伝集』の5冊を中心に、「家相考鑑」の状況の描写を抽出し、分析をすることにより、「家相見」と呼ばれる家相文献の著者達の仕事の内容や実像について考察し、彼らが当時の住まい造りに果たした役割を明らかにする。

結論 文献中の上記の内容の描写は、家相判断の一般論の重みづけの為の具体例として紹介される。これには「摂州兵庫灘辺住吉より家相考鑑のために請せられ、逗留の内」のような具体例と、「天文年中美濃の斎藤道三織田家と戦ふの軍中に於て」のように歴史上の逸話に範を求める例がある。家相見の仕事は、大工の指図書(建築図面)を「朱墨を以て改め所を指図」し、添削をしてサインを残すことである。その際、神道や茶道などのしきたりには踏み込まない気遣いを見せるが、他流派の同業者には厳しい態度で臨んでいる。営業形態は前述のように客に請われて出張する場合と、「予が住居へ居宅の図書を持来り家相考鑑を需る」場合がある。大工の図面に家相判断を施し、建て替えや増築の相談に乗る「家相見」像と、そのテキストとしての家相文献の存在が明らかになった。